

愛知県気候変動適応センターでは、12月7日(土)に開催された「環境調査センター 一般公開デー」において、「巨大デジタル地球儀で見る異常気象」と題して催事を行いました。

巨大デジタル地球儀(ダジック・アース*)には、日本に大雪をもたらした2024年1月下旬と、甚大な被害をもたらした台風10号が発生した8月下旬の2つの時期の地球全体の雲の様子を投影し、参加者にご覧いただきました。

* ダジック・アースとは、地球を立体的に表示し、科学を楽しんでもらうものです。

また、国立環境研究所地球システム領域地球システムリスク解析研究室の塩竈秀夫^{しおがまひでお}室長に、ダジック・アースを用いた特別講演「孫は祖父母が遭遇しないような暑い日と大雨を何度経験するのか?」を行っていただきました。

講演では、気候予測の結果をより自分事として捉えてもらうために、1960年から2040年まで生きる人(祖父母)に2020年に孫が生まれ、その孫は2100年まで生きるというケースを例にあげました。そして、気候モデルによる気候変動予測データを用いて、祖父母が一生の間で一度も遭遇しないような極めて暑い日や大雨を、その孫は生涯で何日経験するかについて解析した結果を、次のとおり解説しました。

- ・気候変動対策を導入しないシナリオでは、日本で生まれた孫世代はその生涯で、祖父母が経験しない暑い日を400回程度、大雨を3回程度経験する。
- ・パリ協定の2℃目標を実現したシナリオでは、孫世

代は同様の経験を、それぞれ20回程度、2回程度に抑えられる。

- ・世界的にみると、気候変動対策を導入しないシナリオでは、孫世代が1,000回以上の暑い日と5回以上の大雨にさらされる地域があり、気候変動の地域間の不公平性が存在する。
- ・私たちの世代が温室効果ガスの排出量を削減する緩和策をとることで、私たちの子どもや孫が経験する気候変化や地域間不公平性を大きく抑制することができる。
- ・避けられない気候変化に対しては、影響を低減するための適応策が必要であり、緩和と適応の両輪が重要である。



特別講演の様子

参加者からは、「子どもが地球儀に興味津々でいい学びになった」「特別講演のお話は興味深かった。できる対策はしていきたい」などの感想が寄せられ、多くの参加者に気候変動について自分事として捉えていただくことができました。

環境調査センター 企画情報部
愛知県気候変動適応センター
電話 052-910-5489 (ダイヤルイン)

愛知県気候変動適応センターだよりのバックナンバーはこちら
<https://www.pref.aichi.jp/site/ailccac/tekiou-dayori.html>

